

# 小・中学校等における特別支援教育の 全校的な推進に向けて ～教職員の多様性を生かした校内研修モデル（試案）～

夕張市立夕張中学校教諭 松島 あすか（令和3年度北海道立特別支援教育センター長期研修生）

# 研究の背景

通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒の割合（全国）は、6.5%。（小学校7.7%、中学校4.0%）

文科省初等中等教育局特別支援教育課「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」平成24年12月

# 通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒の割合（北海道）

校内委員会において特別な教育的支援が必要と判断した児童生徒の有無  
(特別支援学級在籍者除く) ※通常の学級在籍者及び通級による指導を受けているもの



道教委「特別支援教育体制整備に関する調査」令和3年4月

# 学習指導要領解説（H29年告示）

通常の学級にも、障害のある生徒のみならず、教育上特別の支援を必要とする生徒が在籍している可能性があることを前提に、全ての教職員が特別支援教育の目的や意義について十分に理解することが不可欠である。

（総則編 第3章2（1））

# 小・中学校等における課題

- 「特別支援学級等での教職経験がある」という校長が少ない。(全国)
- 特別支援教育の経験年数が少ない教員や期限付きの教員が特別支援学級や特別支援教育コーディネーターを担当することが多い。(本道)

全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会調査本部「令和3年度 全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会 調査報告書」(令和4年1月)、北海道教育委員会「特別支援教育に関する基本方針 [平成30年～34年度]」平成30年3月より

# 似たような相談 を繰り返す

自信がない



異動等で取組が  
継続されない



# 本道の小・中学校の 特別支援教育に関する課題

○全ての教職員による指導・  
支援体制の構築

→「自分ごと」と捉えられて  
いないのではないか。

# 本道の取組

- 特別な教育的支援を必要とする児童生徒への指導や支援の取組が、全ての児童生徒を大切にす学級づくりや分かりやすい授業づくりに役立つという視点に立った**校内研修**の充実

# 本道の取組

- 特別支援教育の専門性向上に向けた**校内研修**を一層充実することができ**る資料等の作成・提供**

(道教委「特別支援教育に関する基本方針 平成30年度～34年度」H30.3)

# 研究の目的

- 教職員が特別支援教育を自分ごととして捉え、主体的に自身の取組に生かそうとする意欲喚起の契機となる校内研修モデルを検討する。

# 研究の方法

- 先行研究や文献研究
- 研究協力校における実践研究
- 質問紙やインタビューによる意識調査、研究協議

日付		実施項目
令和3年	4月～	文献研究
	7月29日	第一回夕張市小・中・高等学校特別支援教育コーディネーター研究協議
	9月10日	研究協力校教職員への意識調査Ⅰ
	10月4日	研究協力校における校内研修①（対面による集合研修）
	10月9日	研究協力校教職員への意識調査Ⅱ
	10月	研究協力校における校内研修②（学年グループによる事例検討）
	11月8日	研究協力校教職員への意識調査Ⅲ
	12月3日	研究協力校教職員への意識調査Ⅳ
	12月20日	研究協力校における校内研修③（オンライン会議システムを利用した遠隔集合研修）
	12月27日	第二回夕張市小・中・高等学校特別支援教育コーディネーター研究協議
令和4年	1月11日 ～13日	研究協力校教職員へのインタビュー調査
	1月21日	研究協力校管理職へのインタビュー調査

# 校内研修に関わる現状と課題（文献研究より）

## ○ 「Society5.0 時代」の到来等

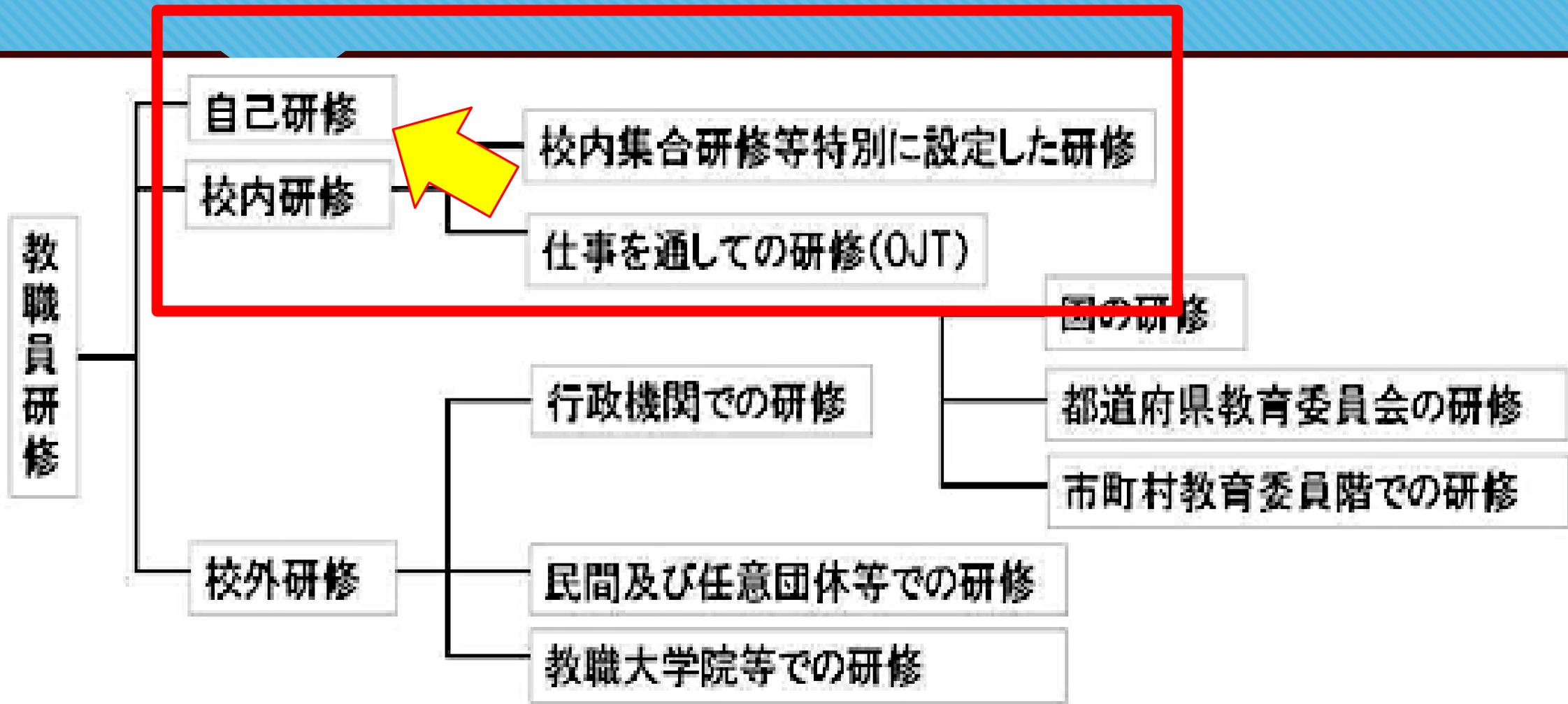
→ 教師の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実の必要性

「『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて 審議  
まとめ（令和3年11月）」

# 研修の種類と課題

研修	主な課題
自己研修	<ul style="list-style-type: none"><li>○ 積極的な自己研修と研修方法の工夫改善</li><li>○ 個人の課題に特化した研修ができる反面、視野が狭くなりがち</li></ul>
校内研修	<ul style="list-style-type: none"><li>○ 校内研修体制の整備</li><li>○ 適切な研修計画の作成と時間の確保</li><li>○ <u>0JT（仕事を通じた研修）の意識づけと校内集合研修等との関連</u></li><li>○ メンター方式の研修の推進</li><li>○ 校内研修と校外研修との関連</li><li>○ 効果的な研修方法の工夫改善</li></ul>
校外研修 (行政機関)	<ul style="list-style-type: none"><li>○ 研修ニーズの把握と魅力ある研修の実施</li><li>○ アクティブ・ラーニング型研修への転換</li><li>○ ライフステージに応じた研修の意識づけと研修意欲の高揚</li><li>○ 大学等との連携</li><li>○ 研修効果の測定と評価</li></ul>

# 研修の種類と課題



# 校内研修の設計

- 効果的な研修を実施するには、「企画」、「運営」、「評価」を一体的に充実させる必要がある。

→参加者の自律的な学び

# 上司の影響

- 参加者の研修後の実践度に対して、研修前後の上司の関わり方が大きく影響を及ぼす。

中村文子、ボブ・パイク 『研修デザインハンドブック』 より

# 全教職員に求められる特別支援教育に関わる知識・技能

- 主な障がいの特性等に対する理解
- 障がいのある児童生徒の特性に合わせて指導方法を工夫する力 等

→障がいの有無に関わらず全ての児童生徒の多様性を理解し、尊重するという態度

# 本道におけるこれまでの取組

- 特別支援教育コーディネーターの指名や校内委員会の設置
- 特別支援教育パートナー・ティーチャー派遣事業の活用等関係機関との連携
- 「校内研修プログラム」、「支援体制づくり取組事例集」

# 小・中・高等学校の現状

- 特別支援教育の視点を生かした実践に消極的な人もいる。
- 特別支援教育の必要性や有効性を感じた経験がない教師は受け身的な意識である。
- 必要性を感じていても、実践には結びつかない。

(第一回夕張市小・中・高等学校特別支援教育コーディネーター研究協議より)

# 「個に応じた指導」との関連

- 靴箱や傘立てに児童生徒の名前を表示するといった視覚的な支援
- 板書する際のスピードや文字の大きさの工夫

(第一回夕張市小・中・高等学校特別支援教育コーディネーター研究協議より)

# 小・中学校等における 特別支援教育に関する教職員研修

- 行政機関等の外部機関における校外研修  
→ 通常の学級担当者の受講機会が少ない。
- 校内研修  
→ 年間 1 回程度。「校内研修プログラム」  
の活用頻度は低い傾向。

# 新しい時代の校内研修に求められる要素

- 特別支援教育の理解を促す校内研修の必要性
- 教師の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な取組
- 教職員の「多様性」の理解促進

# 校内研修モデル（試案）の作成

- 研究協力校：夕張市立夕張中学校
- 校内委で話題にしたり、外部機関に相談したりした通常の学級に在籍する生徒は、10%程度。

# 実施内容

- 校内研修（対面集合型、グループ研修、遠隔集合型の計3回）
- 意識調査（4回）
- インタビュー調査

自信がない



獲得すべき知識・技能の  
整理と実践

似たような相談  
を繰り返す



知識・技能の  
身に付け方の  
学習

異動で取組が  
継続されない



協働的な課題解決方法  
の獲得

# 校内研修①の内容

	内容	時間
説明①	課題の整理と共有	3分
演習①	身に付いている知識・技能の自覚と共有	15分
説明②	自覚した知識・技能への価値づけ 新たな知識・技能の獲得方法の提示	7分
演習②	新たな知識・技能の獲得方法の実践	15分
説明③	特別支援教育以外との関連 教職員の多様性を生かした課題解決方法 の汎用性	10分

# 説明① 課題の整理と共有

- 「特別支援教育」に対する教職員の意識調査の結果と課題
- 特別支援教育に関わる全ての教師に必要な力
- 身に付いている力と獲得すべき力の整理

## 事前アンケート結果

「あてはまる」「ややあてはまる」の合計

必要性を感じる。

88% 94%

有効性を感じる。

できそうだ。

53% 48%

実践している。

## 全ての教師に必要な力

- 障害の特性等に関する理解
- 指導方法を工夫できる力
- 合理的配慮に対する理解
- 個別の教育支援計画・個別の指導計画などの特別支援教育に関する基礎的な知識

必要性を感じるが難しい。

中教審「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」（R3.1.26）

# 演習①

## 身に付いている知識・技能の自覚と共有

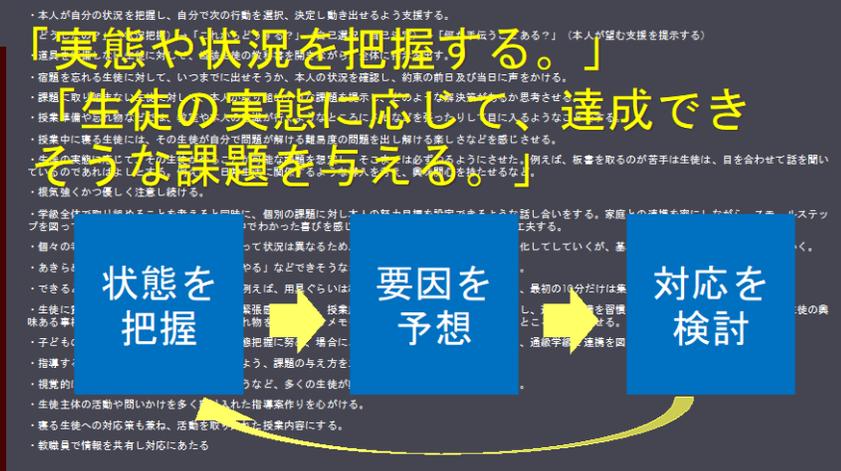
- 対応したことのある生徒を思い浮かべながら、LD、ADHD、自閉症の特性についての知識を共有。

※「答え合わせ」はしない。

# 説明② 自覚した知識・技能への価値づけ 新たな知識・技能の獲得方法の提示

- 「特別支援教育」の考え方
- 演習①の知識の共有の必要性
- 教職員が実践している「個に応じた指導」と「特別支援教育」の関連
- 「指導方法の工夫」に必要な実態把握のコツ

障がいの有無に関わらず、  
みんな一人一人違うはずだから、  
それぞれに合った対応を考えよう。



# 説明② 自覚した知識・技能への価値づけ 新たな知識・技能の獲得方法の提示

- 「特別支援教育」の考え方
- 演習①の知識の共有の必要性
- 教職員が実践している「個に応じた指導」と「特別支援教育」の関連
- 「指導方法の工夫」に必要な実態把握のコツ

生徒を深く、細かく理解するために

□ 「なにが難しいんだろう？」

□ 「……」  
つまり、  
□ 多様な視点から生徒を理解する。

□ 「もしかして○○だからかな？」

□ 「どんな時に困難さが際立つ？」

たく  
く  
現  
状  
の  
要  
因  
を  
想  
す  
る。

## 演習②

# 新たな知識・技能の獲得方法の実践

- 生徒1名について、困難さの要因をできるだけたくさん予想する事例検討。
- 説明②で示した方法の実践。

### 現状の理解（3分）

- 要因を探りたい生徒の主な状態を簡潔にまとめる。（司会を中心に、グループで）
- 模造紙の上部に書く。（記録）

生徒Aの現状

・  
・

# 説明③ 特別支援教育以外との関連、教職員の多様性を生かした課題解決方法の汎用性

○特別支援教育と「個別最適な学び」の関連

○演習と「協働的な学び」の関連

○演習の汎用性

学習指導要領の趣旨の実現に向けて

- 「個別最適な学び」  
→教師視点では  
□ 「個に応じた指導」
  - 「協働的な学び」
- 自分のよさや可能性を認識する
- 他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働する

「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」(R3.3)

顔や制服が写った写真や動画を投稿した

42%

他者への批判・文句を投稿した

28%

55%

76%

トラブルにあった時、親に相談する

トラブルにあった時、ネットで調べる

# 「説明」部分の意図

「身に付いている知識・実践  
の価値づけ」と「新たな知  
識・技能の獲得方法」の提示



「できていること」を見  
つけて、認める、褒める、  
関連づける

職員集団の実態が把握できる校内の講師だから可能。  
※外部講師にはできない。

# 「演習」部分の意図

- 説明した内容の体験・実践
- 教職員の多様性を尊重した  
「協働的な学び」の体験

# 演習を「協働的な学び」にするために留意したこと

- ① 全員が参加できるテーマ設定。
- ② 「答え合わせ」をしない。
- ③ 付箋の活用（ブレインストーミング、KJ法）
- ④ 役割分担（司会、記録、発表、道具、時間）
- ⑤ 活動の目的に沿った用具の準備 など

# 校内研修①事後アンケート

新たな気づきがあった！

みんなで話すことって大事！

普段話さない先生の視点が新鮮だった！

自分を振り返ることができた！



みんな生徒をよく見ているし、考えていると気付いた

# 校内研修②

## 【目的】

- 特別支援教育以外のテーマにおける「協働的な学び」の機会とするため。

## 【実施方法】

- 任意のテーマ、日程でグループごとに実施。

# 校内研修③の目的

- 個人の意識変容について調査する。
- 教職員それぞれの個人内省察の機会とする。

# 校内研修③の内容

- 意識調査 I ～IVの回答を振り返る。
- 自己変容の要因について気が付いたことや、意欲が継続されないという課題を解決するための工夫として考えられることを、ワークシートに記入。

# 夕張中教職員への意識調査（計4回）

11の設問で構成。

【設問例】

「特別支援教育について、学んだり調べたりする必要性を感じる」

「特別支援教育について、様々な方法で学んだり調べたりしている」

など

特別支援教育に対する  
意欲を  
自己評価

# 「特別支援教育について、様々な方法で学んだり調べたりしている。」



44% ⇒ 66% ⇒ 59%

- あてはまる
- ややあてはまる
- ややあてはまらない
- あてはまらない
- 欠席

# 「特別支援教育について、学んだり調べたりしたことを実践している。」

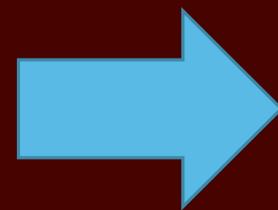


50% ⇒ 66% ⇒ 61%

- あてはまる
- ややあてはまる
- ややあてはまらない
- あてはまらない
- 欠席

# 数値の変化から

- ① 校内研修で、特別支援教育に関わる意欲が喚起された。
- ② 向上した意欲の継続に課題が残った。



インタビュー調査

# 自己評価低下の理由

- 時期的に進路指導等で多忙だったから。
- 有効な対応策が分かり、以前ほどの労力をかけて生徒に対応していないから。
- 研修直後に比べて、自主的な取組が少ないと感じたから。
- 一人で取り組んでいると自信がなくなっただから。

# 学校経営、学校運営の視点から

- 教職員の多様性を生かす重要性、学習指導要領との関連性にも気が付くきっかけとなる校内研修
- 特別支援教育の視点を根底に据えた学校経営や学校運営を行う重要性を再確認

# 成果

- 特別支援教育の理解や実践に対する意欲が喚起され、実践に結びついた。
- 「校内研修モデル（試案）」を作成した。

# 課題

- 研修後の実践を継続するためのフォローアップ
- 講師や学校種に因らない汎用性

# 考察

- 研修後の行動変容に対するサポート
- 多様性の「協和」
- 研修講師に求められる資質
- 本道の課題との関連

# 教職員集団の魅力

- 知識や経験は様々だが、「特別支援教育」の視点は持っている。
- 「多様性を尊重する」とは、「教職員それぞれのももの見方や考え方を信頼する」ということ。